



奥久慈漆植樹祭（下大門町）

梶ひろみ

学生時代、デザインを学んでいたころから、日本の文化・日本美の特質を抽出し現代の暮らしの中で生かしていけないかと模索していた。その中で和紙や漆に出会い、ふと郷里を振り返れば近くに二つとも現存し細々とはあるが生産が続いていることに改めて驚いた。当時、近代化の波に押され漆や和紙も「なくなりつつあるもの」としてあげられていたが、なくしてしまいうにはあまりに惜しいとの思いから深くかかわるようになっていった。

時は移り今、そのような伝統的な文化や材料に目が向けられる時代になりつつある。重要文化財の修復にさえ中国産漆を使ってきた文化庁が「文化財建造物の保存修理に使う漆は国産品とする」という方針を示すまでになっている。植林をした漆木から樹液が採れるようになるまで十数年、一回の漆掻きで採れる樹液はスプーン一杯にも満たず、一本の漆木から採れる樹液はコップ一杯弱でしかない。貴重な材料と漆にかかわる文化と、それを支える里山や産業を思うと今始めなければとの思いを強くするばかりである。

山漆と植林された漆とは紅葉の色合いまで違い樹液の質も大きく異なる。植林された漆はそばを歩いただけでかぶれることはないが、恐れるあまり植林の土地を借りるのも難しいことが多く、やっとたどりついた植林ではあった。来年の夏は緑の葉が繁り、秋には黄色い葉が里山に映えるだろうと、苗用の穴掘りでへとへとになりながら思いを馳せた。

子供たちへつなぐ古の歴史

中野富士山古墳保存会

常陸太田市の南部には、県指定文化財の梵天山古墳（島町）や星神社古墳（小島町）など多くの古墳が点在していますが、中野地区にも古墳のあることはほとんど忘れられていました。茨城県考古学協会のメンバーが近隣の調査の折に、中野の地形に興味を持ち調査したことから、前方後円墳があることが分かったのは数年前のことでした。

地元町内有志を中心に「中野富士山古墳保存会」というボランティア組織を結成、測量の協力や樹木の伐採などに取り組んできました。現在、市の提案型まちづくり助成事業の採択を受け、参道の整備や桜・もみじなどの樹木を植え、古墳公園として地域内外の人たちへ、歴史を思い憩える場所として整備が続いています。

中野交差点近くにある後円墳部分への登り口には石段を整備、今年は前方墳部分から旧道へ下る道も整備され、子供たちでも安全に古墳を確認できるようになりました。奥部分には「盗掘の跡でしょう」と言われるくぼみや、天明の飢饉の

年に奉じられたらしい小さな祠ほいも残されています。現在は登り口付近に駐車スペースがなく、訪れる方にも、案内する地元の方にとっても悩みの種ですが、地元の方の協力を得て、駐車場も整備したいと、夢が広がっています。



古墳の頂上付近にまつられている祠



樹木の伐採などの整備



前方古墳部分への登り口の石段を整備

郡戸小学校

三世代ふれあい教室 期日十月三十日(土)

郡戸小学校で行っている三世代ふれあい教室では「名人・地域に学ぼう」をテーマに郡戸の歴史探検などの講座を設け、郊外にも学びの場を求める取り組みを行っています。テーマ別に設けられた七つの講座の中から、子供たちが学年の枠を超えて自分たちで学びたいという講座を選びます。昨年はその講座の一つに中野富士山古墳が選ばれ、実際に現地まで足を運び、地域の先輩方が美しく整備した古墳を見学しました。

今年は、郡戸小学校にお子さんやお孫さんがいらつしやらない地域の方にも、この講座に参加いただき、より多くの方に地域の歴史などを知っていただきたいと、広く参加を呼びかけていく計画だそうです。

この古墳がある山林は整備に取り組んでいるメンバーの所有で、その方たちが小さなころは里山の手入れも行き届いており、古墳のふもと付近にあった小径を学校の帰り道に立ち寄りたりしたそうです。今回整備される前までは、うっそうとした森となって立ち寄る人もなくなり、古墳があったこともほとんど忘れられていました。整備されたことにより、この地の歴史が改めて子供たちに受け継がれることになりました。

間伐されて明るく陽がさすようになった頂上からは、一六〇〇年以上前から意味ある地として守られてきた歴史を思い起こさせるような眺めが広がっていました。訪れや

梵天山古墳群と中野富士山古墳周辺地図



すく整備するだけでなく、学校や地域と連携して人が集い歴史を紡いでいく場として再生する取り組みが、学校と地域双方から求められた証として、この眺めを多くの方に楽しんでいただけたらと感じました。今年の「三世代ふれあい教室」は十月三十一日(土)の開催予定です。子供たちと一緒に地域の歴史学習に参加し、さらに伝えてくださる先輩として学区内の方たちの参加交流が楽しみです。

(塩原慶子 武藤卓)



常陸太田の漆く古くて新しい特産物へ

今年三月、市内下大門町で漆の植樹祭が行われました。常陸太田で漆を生産しようとする取り組みの二環です。さらに、植樹祭をきっかけとして常陸太田で初の漆の展示会開催へと活動が広がりました。九月十二日から始まる展示会に先立ち、常陸太田の漆についてご紹介します。

奥久慈漆植樹祭

植樹祭の主催者のおひとり、梶ひろみさんにお話をうかがいました。「茨城県北部は江戸期から漆の産地として知られていました。現在、奥久慈漆の生産地は常陸大宮市と太子町ですが、常陸太田市も、水府地区・里美地区などは江戸時代からの



漆の塗られていた土器
(真弓町仲城遺跡で出土)

産地だったそうです。昭和五十年ごろまでは漆掻きの様子も見られたと聞いています。」と梶さん。久慈地域の物資の集散地であり、商業の中心地

であった鯨ヶ丘地区には古くからの町並みが残っています。その文化財や歴史的建造物にはこの漆が使われてきました。「漆文化が常陸太田地区で継承されてこなかったのは、化学塗料や安価な中国産漆の流入とともに、樹液の生産のみで漆器などの漆製品の生産地とはならなかったことが理由と考えられています」。

伝統的な塗料としての漆が見直されつつある中、日本産の漆の生産増を願う漆芸家などが集まって漆の植樹等の活動を全国で展開しています。「漆の木にもいろいろあり、樹液のよく採れる漆から分根苗を選びぬき、苗生産を行うとともに植樹しています。下大門町の美しい里山に漆の紅葉が映える景色を見守っていききたいと願っています」。

「殺し掻き」漆の採取には、二つ方法があります。その一つが「殺し掻き」という手法です。樹液が採れるまで成長した木から一年間でできるだけ多くの漆を採る方法ですが、その名前の通り殺し掻きでは、樹液を採った木は枯れてしまいます。その際、根元に傷をつけておくと、翌年そこから芽が出てきます。その後は苗から植樹するよりも早く育ち、数年で漆を採れる状態にまで成長します。

「養生掻き」木を枯らさず、何年にもわたり漆を採り続ける手法を「養生掻き」といいます。一年で採取できる量は少ないのですが、長い期間採れるため漆の樹液の総量では殺し掻きより多く採ることができます。

NPO法人杵木呂の会

植樹祭の主催団体の一つ「杵木呂の会」は日本産の漆の存続と継承に向けて活動をしています。名前の由来は「一人1kg以上の日本産漆を生産する」ことで、漆文化を支えています。

理事長の本間幸夫さんは漆芸家でもあり、常陸大宮市に工房と漆林の造成もなされています。



昭和22年 東京生まれ
昭和42年 立教大学を中退し木工芸彫刻家 故柴崎始氏に師事
昭和57年 人間国宝・故赤地友哉氏に師事する
昭和63年「萩窪銀花」にて、個展活動始める
平成4年 常陸大宮市に自らの漆林を造成する
平成7年 日本橋三越本店にて個展。以降、定期的に開催
平成12年 常陸大宮市に漆液と木工轆轤の為の仕事場を新設
現在、「萩房」主宰。奥久慈漆生産組合顧問。
日本産漆を支援する「NPO 法人杵木呂の会」理事長。

杵木呂の会は一九九七年、日本産漆の激減を憂い立ち上げた会です。日本産の漆の良さと使い方の啓発活動をはじめとして、二〇〇九年からは漆の植樹活動も始めました。現在常陸大宮市を中心に、ほぼ毎年漆の植樹をしており、約七〇〇本以上の漆木を保有しています。奥久慈エリアで生産される漆は、透明度が高く、光沢に優れ、乾

きが早くて伸ばしやすいことから、その品質は全国的に高く評価されており、主に高級漆器の仕上げ用に使用されています。生産量は全国二位で、そのほとんどが常陸太田市・大子町周辺で生産され、この地域は全国有数の漆の産地となっています。

漆工芸の原材料である日本産漆の現状は、漆掻き職人さんの高齢化と後継者難、中山間地域農業の疲弊による漆木の激減とが重なり、大変厳しいものがあります。九千年以上という長い歴史を持つ日本の代表的な基本材料が、この先危機的状態を迎えてしまうことを大変憂慮していました。そのようななか、地域の方のご協力・ご理解をいただき、



木皮板造花器

今年三月初めて常陸太田市でも植樹を行うことができました。漆の古くて新しい産地として常陸太田でも漆文化を守っていくという気運の高まりの結果と考えています。

(本間幸夫)

漆芸家 菊池麦彦さん

漆という自然素材にこだわり伝統技術を現代の生活に合う新しい形に模索していきたいと考えていらつしやる菊池麦彦さんという若手の漆芸家の工房が水府にあります。ご自宅は埼玉ですが、ご実家が水府・天下野町なので両方に工房を構え、水府では大きな作品の制作や、金継ぎ(割れてしまった陶器を漆で接着する技法)教室も開催しています。漆塗りの器以外にも、漆芸作家にはめずらしい漆塗り釣り道具の制作も行っており、壺木呂の会員でもあります。

漆芸を仕事とするきっかけからおうかがいしました。「小学校低学年から釣りをやっていて、最初は釣り関係の仕事に就きたいと思っていました。高校生ぐらいになって木を切ったり削ったり彫ったりするのが好きになり木工のある芸術系大学に進みました。その大学で木工に携わるには漆芸しかなく漆芸を専攻としたのですが、その専攻の先生の『変り塗り』の技法を目の当たりにして衝撃を受けました」。漆黒の机の上に木箱と漆を塗り重ねた色とりどりのルアーを並べ、そのルアーを使って本物の魚を釣り上げた映像も展示した卒業制作では優秀賞を受賞、他にも日本漆工協会の最高賞でもある漆工奨学賞を受賞されている



変り塗り盛り皿



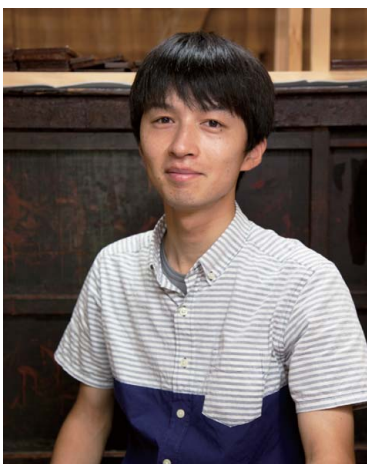
貝殻箱

ます。美的に鑑賞されるだけではなく、実用的な価値をも満たし、そして自分が好きな領域にも融合させ、伝統技術を伝えてゆこうとしていることに驚きと尊敬の念を禁じ得ませんでした。

「見た目の美しさはもちろん重視していますが、一番は、若い人からお年寄りまで誰でも使ってもらえるようなものを目指しています。暮らしの中でお祝いごととか特別な時のものでなく、もっとカジュアルに、気軽に漆器を使って欲しいという思いがあり、新しい漆の形・工芸の形を日々模索しています」。十月十日からは、水府のご自宅と工房を開放して、漆の食器と地元野菜の料理のコラボ企画を予定しているそうです。若い才能あふれる作家さんたちが常陸太田や県北の風土を生かした樹木を育成し、作品に仕上げていくプロセスが、漆の苗木の成長に重なって見えてきます。

(塩原慶子 武藤卓 武藤千絵子)

※奥久慈うるしと一木呂の会展
会場 郷土資料館「梅津会館」
期日 九月十二日～二十三日(午前九時～午後五時)



1985年 埼玉県さいたま市生まれ
2010年 東北芸術工科大学美術科工芸コース
漆芸専攻
卒業卒業制作「LURE BAG」優秀賞受賞
日本漆工協会奨学賞受賞
常陸太田市に陶・漆工芸 麦工房を新設
奥久慈漆生産組合 組合員、壺木呂の会 会員

太田中学校

太田中学校は昭和二十二年度の学制改革と同時に、太田町立太田中学校として太田小学校の校舎の一部を譲り受け中城町で開校しました。その後、昭和四十二年に常陸太田市立誉田中学校と統合し、現在の地西山公園の一角へ校舎を新築して現在に至ります。生徒数は一年生九〇名、二年生九五名、三年生九五名、合計二八〇名（平成二十七年四月八日現在）、各学年三クラス編成です。

今回、太田中学校を紹介するにあたり生徒会長の牧島美夢さん、副会長の館 詩織さん、萩谷勇太さん、三名の三年生にお話を伺ってきました。

■太田中学校はどんな学校ですか？

まだ、緊張感も抜けない時間にいきなり抽象的な質問をしました。一生懸命考え答えてくれました。

一、体育祭や太中祭の練習・準備等に、クラスのみんなが積極的に取り組む団結力のある学校です。

二、部活にはみんなが積極的に参加していて、特に体育系の部活は成績も良い結果が出ています。

三、T P P 活動を通じて、生徒全員が元氣な挨拶を行う学校です。

■T P P 活動とは？

T P P 活動とは、太中 プライドアッププロジェクトのことです。挨拶・時間・清掃・身だしなみの四つのプロジェクトを行うことによって、元氣な挨拶が飛び交い、時間を守り、校内の美化に努め、はじめある身だしなみ

の生徒が集う太田中学校にする活動です。

この活動は、平成二十五年年度の生徒会が発案・声掛けをして始まった活動で、正規の委員会活動とは別におこなっています。生徒に参加義務はなく、参加を希望した生徒約一〇〇名によって運営されています。参加する生徒は「挨拶」「時間」「清掃」「身だしなみ」を担当する四班に分かれ、毎週一回行う「班の会議」と各班のリーダーと生徒会役員で行われる「T P P サミット」により運営されています。

勿論、先生たちのアドバイスや協力を得ての活動ですが、生徒の発案でスタートし、希望する生徒たちで運営されている「T P P 活動」の説明に思わず「すごいね！」のことが出てしまいました。

最後に生徒会長が「正式な委員会活動との調整等に苦労することもあるけれど、先輩たちが苦労してスタートさせた、このT P P 活動を後輩たちにつかり繋ぎたい」「でも、T P P 活動が無くても太田中学校で学んでいれば、「元氣な挨拶」「時間を守る」「身の回りの美化」「正しい身だしなみ」が自然と身に付く。そんな太田中学校になったらいいんだけど」と話してくれました。

(五十嵐 弘)



館 詩織さん
(副会長)

牧島 美夢さん
(会 長)

萩谷 勇太さん
(副会長)

生涯学習情報誌「フォonz」は、2～3ヶ月毎に発行し、市内全世帯に配布され、大きな宣伝効果が期待できます。ぜひご利用下さい。

◆広告を募集している情報誌

平成28年1月から平成28年4月までに発行予定の
生涯学習情報誌「フォonz」第77号から第78号

◆広告料(1回あたり)※会長が指定するページの最下段

- ① 縦4.5cm×横 8.8cm／10,000円
- ② 縦4.5cm×横17.9cm／20,000円

問合せ

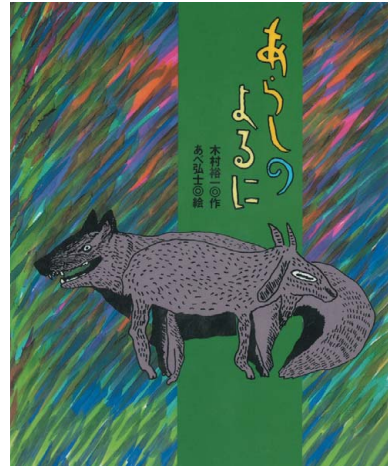
フォonz・ネットワーク事務局
(生涯学習センター内)

TEL:0294-72-8888

URL:<http://edu.city.hitachiota.ibaraki.jp/gakushu/>

『思い出の絵本』

『あらしのよるに』 関 浩子（赤土町）



良くして次に会う約束をした。

名まえも顔も知らないまま、合言葉は「あらしのよるに」。次の日のお昼に小屋の前で会う事になった。約束の日のお昼、小屋の前

に姿を見せたのは「オオカミ」と「ヤギ」だった。

この本はシリーズになっており第六部が完結編となっています。一冊では物足りなくて全部購入しました。二匹はまっ暗な小屋の中で知り合います。顔も見えず鼻も効かない中

かかるとお互いの声だけです。話しをしているうちに気持ちを通じ合ってくるのを感じた。その時ピカッといなずまがひかりお互いの顔が見えたと思っ

ほっと

ひといき

『キキョウ・桔梗(キキョウ科)』

日本全土に分布する多年草。日当たりの良い草原に生育し、七月〜九月に青紫の大きな花を咲かせます。秋の七草の代表的な草花として親しまれていて植物で、かつては人家付近の草原に普通に生育していました。栽培されることも多く、園芸種として改良もされていますが、自生種との区別は難しいようです。

ところで、このキキョウ

ちよっと

『玉喜屋本店』

食欲の秋とはよくいったもので、秋になると必ず買いに行かなくちゃと思う和菓子が、「芋ようかん」。女性が好きと定番のように言われる焼き芋より、実はこちらの方が数段好きです（正直に告白しちゃいます）。玉喜屋さんにいそいそと車を走らせる喜びがあったりありません。ひんやりとし

は環境省や茨城県のレッドリスト（絶滅のおそれのある野生生物の種）に記

載されています。その理由は、近年の草地の管理放棄によって生育地が藪になり、全国的に激減したことに



向にあります。植物の世界にも大きな影響が出ていることに危機感をもつことが求められています。

（安嶋隆）



た羊羹を数センチ包丁で切り、厚い洪茶と一緒にいただく、日本人でよかったなんて、お約束のつぶやきもしちゃいます。早く秋がないかな、るんるん。

今年の芋ようかんの発売は、お彼岸あけの予定だそうです。詳しくはお店にお問い合わせ下さい。

（塩原慶子）

常陸太田市和田町二六〇〇一
電話 八五〇二〇六
営業時間 八時〜十八時三十分
定休日 木曜日（祝日は除く）

新太田点描 12

篠原香山と太田地方

香山は酒沼のほとり海老沢村(現・茨城町)で享和三年(一八〇三)に生まれた。諱を吉信と云い、通称は所三郎または寛と称した。香山はその号である。農業の傍ら水戸藩士で画人の立原杏所や松平雪山に画を学び、また独学で和歌や俳句を習得するなど地元では、風流文雅の趣のある知識人として知られていた。明治二十九年(一八九六)に九十四歳で没した。

安政二年(一八五五)二月、香山この時五十三歳、俳人芭蕉の著「奥の細道」に憧れて、その足跡を辿るために海老沢村の自宅を出立したのは十三日の早朝であった。

香山は、この時の旅の始終を「東奥紀行」別名「みちのく小記」と題して所々に挿絵を描きながら書き残している。上巻は海老沢村自宅から松島までの道中を、中巻には、仙台、松島、塩釜の情景等を、また下巻は欠いているがたぶん松島から自宅までの帰り道が記載されていたと思われる。以下、太田地方に関する部分を大略的に紹介しよう。

十三日朝、出立に際して家族・友人・親類縁者等見送りの人たちが水戸まで送ってきてくれたので城下で惜別の盃を交わし、那珂川を舟で渡り青柳、菅谷を通過して額田に宿をとった

翌十四日、天気晴れわたって朝風が身にしみたが早々に宿を出立して久慈川の河合への渡しに着いた。この間の大雨にて洪水は畑にまで達

し青麦や野菜まで浸っていた。川留めが解かれたばかりで急流は矢を射るが如くであったが、同乗者六人と一緒に渡った。磯部の宿に至る数町の桜並木は早や咲きが所々ほころびて朝日に映える風情が美しく、太田への道筋もまた桜並木である。この時ふと見上げると、帰雁の一群が鳴きながら飛んでいた。水戸八景の太田落雁に擬して

千町廣田有一望 景擬看宜太田名

早桜綻所廻頭立 霞外遙聞落雁聲

此処には太田落雁の碑石が建っている。

太田の町から里野宮を過ぎて町屋入口に一つの土橋があり藤蔓の手すりを両端に付けている。橋の上西側は幾々とした石壁さながらの屏風を立てた様である。急流は石に咽んで流聲急雨音を催し仙境に入るが如くであった。

程なくして玉廉の観音に至る。玉たれの瀧は観音堂の後ろの縁より見る様が大変良い。

落ちて来る水にはあらで瀧の面は

みなしら玉のちるかと思見る

曾聞此地有飛泉 未見観音高閣邊

最怪九霄銀漢水 化成白玉散堂前

此の瀧の奇景が最もよい。玉たれ観世音は安産のお守りが出る。

上淵より小里川に沿って行く。急流石に砕けて白い泡はあたかも雪を流すが如く様なれば、

水上に消やらぬ雪をたくわえて

ながしやすらん里川の上

河原野、小菅、此の邊りまではとりわけ難所である。折橋、小中を過ぎて徳田にとまる。

夜もすがら雨のふるかとおもひしは

岩そそぐ水の音にそ有ける

十五日晴れ、宿を出て境の明神社へ参詣する。

常陸、奥州の境なり。松の枝、南へばかり出る。山水の小流南北へ流れる也。

古さとはいづれそれともしら雲のかかれるかたを詠とそ励まし

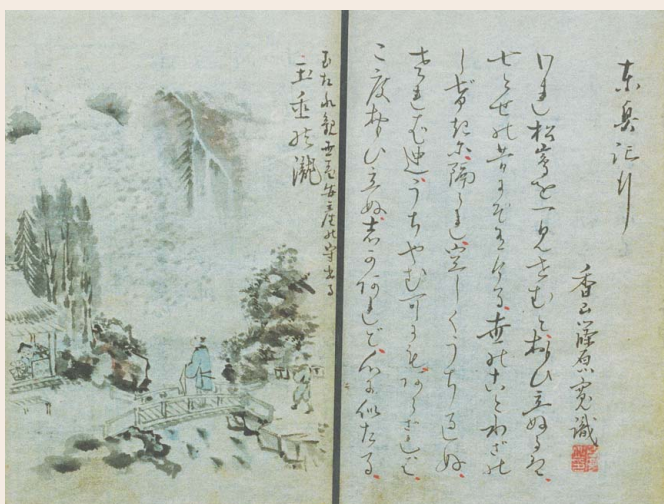
我くにの今や境の宮過ぎて

おく白川の路ぞはるけき

是より白川領上の関上河内村に至れば梅の花盛りに開きたり。いと珍しくおもひぬ。以下、略

拙い意訳文であるが、これを読んで今を旅する人はどう思うであろうか。

(吉成英文)



東奥紀行の書き出しと玉廉の滝